



佐賀県は日本有数のやきものの産地です。現在も県内各地に窯元がありますが、佐賀県と長崎県を合わせた肥前の国は、古くから「やきもの先進地」だったのです。

灰釉茶碗 銘「瑞雲」【奥高麗】  
 (1590~1610年代)  
 竹田隆智夫氏寄贈  
 (佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

鉄絵萩文壺【絵唐津】  
 (1590~1610年代)  
 (佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)



濃灰釉壺【唐津焼】  
 (1580~1590年代)  
 (佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

佐賀県の様々なやきもの 佐賀県は古くからやきものが盛んで、唐津焼、有田焼

### やきものの代名詞となった唐津焼

やきものには、土器、陶器、磁器などの種類があります。

日本を代表する陶器の一つが**唐津焼**です。その起源ははっきりと分かっていませんが、室町時代末から安土桃山時代にかけて焼かれるようになったと言われます。やがて唐津焼は全国に広がり、西日本で

### 調べてみよう

どうして佐賀には多くの窯があったんだろう？



色絵花鳥文六角壺  
 【有田焼(伊万里焼)】  
 (1670~1690年代)  
 (佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

色絵桜樹文皿【鍋島焼】  
 (1700~1720年代)  
 (佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

(伊万里焼)など様々な陶磁器の産地として有名です。

は、やきもののことを「**からつもの**」と呼ぶほどになりました。

豊臣秀吉の命令によって行われた朝鮮出兵(文禄の役・慶長の役)をきっかけに、やきもの先進地であった朝鮮から技術の導入が進められます。これにより、唐津焼の生産量や種類がさらに増大していきます。

唐津焼は、茶道で使う茶碗の名品としても知られます。茶道をたしなむ人たちに人気のやきものであり、江戸時代は唐津藩の保護を受け、藩

### 陶器と磁器の違いって何？

陶器	磁器
叩いたとき、柔らかく低い音をする。	叩いたとき、硬く高い音をする。
原料は陶土(有色粘土)が主である。	原料は陶石を粉砕した石粉が主である。
1250~1300℃で焼き上げる。	1280~1350℃で焼き上げる。
素地が粗く吸水性がある。釉薬により吸水を防ぐ。	吸水性がない。(釉薬は使用)

#### 焼き物にかける釉薬とは

焼き上げた時に器の表面をガラス状にしてつやを出すために掛けるものが釉薬で、代表的原料は木灰・わら灰を混合して水溶液にしたものです。その配合により色が変わります。

から徳川将軍家に茶碗が献上されていました。唐津焼は、明治時代、一度衰退しながらも、人間国宝・12代中里太郎右衛門の登場により勢いを取り戻します。現在では約70もの窯元が、伝統を受け継ぎながら独自の作品を作り続けています。

### 佐賀藩の経済を支えた磁器生産

一方、磁器は江戸時代から生産が開始されました。1616(元和2)年、有田に入った朝鮮出身の陶工・**金ヶ江三兵衛**(李参平)により、有田焼(伊万里焼)の原料となる陶石の採掘場「**泉山磁石場**」が発見されたことで、本格的に磁器生産が開始されたと言われます。日本の磁器は有田から始まったのです。有田での磁器生産は、周辺の波佐見(大村藩)、三川内(平戸藩)などにも広がります。それらの産地で作られた磁器の多くは、**伊万里港**から積み出され、江戸や大坂(現在の大阪)、遠くは長崎の出島を通じて海外へも送られました。そのため、江戸時代、有田を中心とする地域で作られた磁器が、総称して**伊万里焼**と呼ばれました。

有田での磁器生産が本格化すると、燃料用に周囲の山々の樹木が次々と伐採され、山が荒れてしまいました。そのため、佐賀藩では「**窯焼名代札**」を発行して、許可された窯場(生産地)だけに磁器生産を許可します。さらに、有田には「**皿山代官所**」を置き、磁器生産を藩で管理しました。有田の磁器は、佐賀藩の大きな財源の一つとなりました。

1897(明治30)年に、有田まで鉄道が開通し、それまで伊万里港から積み出していた磁器が、鉄道によって出荷されるようになります。有田から直接出荷されることで、「有田焼」の名称が定着したと言われています。

### 技術向上と変遷する様式

有田焼(伊万里焼)の歴史は、技術向上の歴史でもあります。江戸時代初期、1610年代から1650年代ごろまでに焼かれた磁器は、のちの様式

に比べて厚みがある素朴なもので「**初期伊万里様式**」と呼ばれています。それが、1640年代から1660年代ごろになると「**初期色絵様式**」と呼ばれる色絵製品が登場し、赤・黒・緑・黄・青・紫などの色彩が使われるようになりました。その後、1670年代から1690年代ごろにかけては、濁手と呼ばれる乳白色の素地に余白を強調した左右非対称の構図が特徴の「**柿右衛門様式**」が流行します。さらに、1690年代から1720年代ごろには、濃い赤や金を多く使い、全体をさまざまな文様で埋めた豪華な「**古伊万里金襴手様式**」が登場します。

佐賀藩では、献上・贈答用の高級な磁器が藩の窯で焼かれました。その気品ある形態や作風を「**鍋島様式**」と呼びます。1660年代から廃藩置県まで大川内山(伊万里市)の藩窯で、佐賀藩の厳重な管理のもと、技術の粋を集めて作られました。

初期伊万里様式



染めつけふきぎみ やぎ もんざら  
染付吹墨山羊文皿  
1610~1630年代  
栗田夫妻コレクション  
(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

初期色絵様式



いろ えじゆもくからうもんおおざら  
色絵樹木花鳥文皿  
1640~1650年代  
(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

柿右衛門様式



いろえうめうずらもんりんか こざら  
色絵梅鶉文輪花小皿  
1670~1690年代  
栗田夫妻コレクション  
(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

古伊万里金襴手様式



いろえくもそうか よ もだきもんはち  
色絵雲草花四方襴文鉢  
1690~1710年代  
栗田夫妻コレクション  
(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

鍋島様式



そめつけいしとうもんおおざら  
染付銀杏文大皿  
1700~1730年代  
(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵)

※年代は各作品の作成年

COLUMN

多彩な佐賀県をやきもの

唐津焼・有田焼(伊万里焼)以外にも佐賀県ではさまざまな陶磁器が焼かれてきました。代表的なものが、嬉野市の肥前吉田焼、武雄市の武雄焼などです。



ヨーロッパに渡った佐賀の有田焼(伊万里焼)

時代とともに行われた生産技術の革新の背景には、有田焼(伊万里焼)が国内だけでなく、海外に向けて生産されたことがあります。

17世紀中期、磁器を世界各国へ輸出していた中国が、内乱により輸出を中止したことで、有田焼(伊万里焼)が注目されることとなったのです。有田焼(伊万里焼)は、長崎の出島で貿易を行っていた**オランダ東インド会社**の注文に応じて、17世紀中期からヨーロッパの王侯貴族向けの磁器として輸出され、珍重されました。しかし、情勢が安定した中国が輸出を再開すると、有田焼(伊万里焼)の海外向け生産は途絶え、国内

向けに日本人好みの形やデザインを追求したことで、江戸時代中期には一部の裕福な人たちに愛されるようになります。さらに、文様の簡略化などによって、江戸時代後期には広く庶民にも買いやすい価格での生産を可能としました。

2016(平成28)年、有田焼(伊万里焼)と日本の磁器の歴史は400年を迎えました。現在、日本で活躍しているやきもの分野の重要無形文化財10人のうち、井上萬二氏、中島宏氏、十四代今泉今右衛門氏が佐賀県在住です。佐賀県をやきものは、現代においても日本のやきもの界の草分けであると言えます。

学校の取組

【陶芸交流授業】

佐賀県立有田工業高等学校  
セラミック科  
セラミック科3年生が地元小学校へ  
出向き、焼き物制作の指導補助を行うものです。



調べて書いてみよう!

明治時代になると、有田焼がどのように発展したか調べて書いてみましょう。

出かけてみよう!



佐賀県立九州陶磁文化館 (西松浦郡有田町戸杓乙3100-1)

肥前陶磁器をはじめ、九州各地の多彩な陶磁器文化を知ることができます。

TEL 0955-43-3681 / 休館日 月曜日(祝日の場合、開館)・年末(12月29日~31日) / 開館 9:00~17:00(入館は16:30まで)

(佐賀県観光連盟提供)



検索してみよう!

トンバイ堀

陶磁器 歴史

唐津焼 波多氏

佐賀県 人間国宝

